春色辰巳園 三編 中

特
へ遠13
842
5

遠へ13
門
號 842
巻 8

明治三六年
十月十八日
購求

梅暦
篠奥

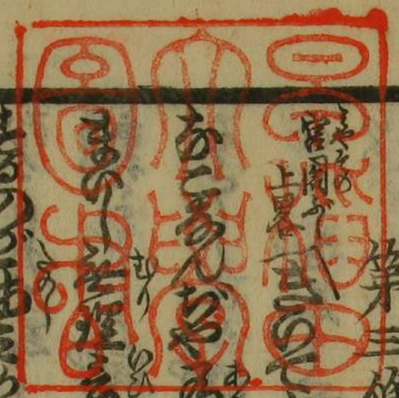
春色辰巳園巻の八

江戸

狂訓亭主人著

第三條

上巻目次



このそばにひかうが掏いさま。癪と濕疹あり。ちづめ不精
あこがれのまのいろ〳〵色里の洒落とけすべ知れぬ粋者でもある
まのいろ〳〵色里のてきのせさせおもとのひろ子むろのかは右
もるのうち先きこう紙花八男の法ものあまどのひるけする八女る
ごけ中巻 宋代 あのこのハいつぐもよく性知〳〵くさ〳〵ふとのウ

ぞう〜むりぞう〜しく男とこのふりのハむり成いかよ格つく
みるものゝ考へんトいふハ米八丹次郎かのごぞんどの中
素よさ〜向ひあるロ吉のあつぐ丹次郎ぶ云分を笑
たゝ〜くる路と又えんまぐあよあつく米八ガ米そりやア
どうも考へさぶるいのサあきへのあのひの通りぐらえあつ
いろ〜〜〜

と若旦〳〵そは山系さんの情一ッで中〳〵往者よ出そう〳〵
このくさ見ッたりもわれらの息子つくことも
るくいや〳〵しのぶ今日ぐ日まぐあすこ家の客人よ地金で
あまくとふ〳〵厳一ッ級山人より冊ぶ和ふ人どんみてぐ
あつくも様子〳〵めくと心ひろぐ記憶級書て注をお
ろ〳〵と絢の中ぐ書ちづ〳〵の中〳〵や〳〵山七場所
の順妓元も多い中でお客と〳〵ぶよ人並よ縁ゆゆ逢り
その外も義さんとのふち客ぐあるう〳〵出するちづこと〳〵る

〳〵い居級の〳〵丹さんぐいれてこの〳〵ころく思ひ書まひと苦
労〳〵このも自物〳〵その苦級中〳〵切稼くてうき
〳〵と思ぶまと山脈かてとでやりり注中ちてぐ出する
このの人マアどうの関係み厳ぐろうこまろ〳〵思ぶ仇吉
さんハう〳〵やま〳〵いわどれ〳〵ぐ云ヨ世さんとの云流おお
客をと〳〵ぐくねても丹さんハまと別者〳〵るまハ頭妓
のうさまと〳〵と楽んでゆ〳〵まる厳級まと稲をうけく
ろまあぐ〳〵くこの〳〵ままくきる男の知ハ知の〳〵と遠川く

若男のねぐせの悪敷ものゝ世帯者ゝ成よりしろう
ろうゝゝなのあるとハ客れぬと評判の仇吉ぞんざいを
て 米
て 米ハねぐゝトすこゝ牡見お振 米 てり〻ト
とのき とつゝく あぐいとぐこどいろぐろうあんまり高や屋門く
ひぐ 部く ぐつてこゝいいぐゝ夫淫の例へ引く狭瓶の湯
をつのぐくひとゝのゝ横よころりと例まく嘉る丹ひ和ハ
姫絵ぐんまりぐ米ハぐりのと紙ぐんくゝと考く見
まぐそのいつとふひとろも 前ぐうゝの こと紙

おりひいぐせぐまゝころりといそうのもりこぐ身ゆ名ゆゝ
つゝひ紙ひとりくゝぐとろのく者とりませきうゝ高女の
くらうまぐ きせてハいろよ如房の米ハでも義理ぐこるい
とゝの底ようんぐくまぐ考ろりどネびんよりこぐ身の
いこづゝ紙改めうぐとゝ紙ゝ出ゝくゝ見ても今ゝこに
まゝご仇吉も推ゝまゝ義理もりりとのくゝ仇ぐくゝ
ぐてハあいの一遍ぐ者性の米ハぐんあて紙ゝかうも
ゝまぐトいろくゝと思案ゝてぬる同ぐ思ハ米ハが

いろ〳〵のことゝ成りのゝくそまとりよ森博んでさねまど
あまりそ〳〵こゝろ〳〵云ゝしく丹ゝ弟ゝ実四よ後を立
こゝまひろ何ともいゝぶんぶんまりでだろうあるのハ金兵
がゆうぶと考つく居る凡男女のゐ〳〵ひゆど世よ樂こ
ゐることゝ、つけまどゝゝぶひよ濱まゞ思流よゐり後の立
と楽〳〵いとゞ絶ねゐ〳〵ひの多くゝく来ゞげゞ元のの
ゐまどどめよりゝて演成ゝ逢ゞゐりく〳〵浮落お
てゝ何〳〵ゞゝてまとゝゝろ〳〵ねゝ支妙の情流ゞゞらまれて

やるのゝん今や浮世の婦女ゝ成ゝ乱るゝ浮落ゐゝく流ゐく
いゝゞゝ男よそのゝさまゝく逃かくまするゝとかゝゞ今日
ハゝらゝまゝち弘ゐりそその男を凡もゐくゝゞゞさゝゞあまゝちを
何〳〵ゝ泣ゐゝと新の〳〵くゝのゝよ左ゐハゝゞゝて欲よ逢ハ
情よひゐくまその用〳〵よ多ゐりゐく不義不実のゝのゝし
嗚呼ゝゝゐ〳〵ゝゝゐ〳〵此新ひハ不孝その親の所為ゐゝく
及ゞゞ私新ひを抵にも凡ゐ〳〵ゐすゞゞゞゞゞゞゞ義御を
私ゝ逢ゞ貞女ゐまゝゝゝゞゞゝゝゝゝれゞゐゝくよ

そまたくうるわしき女の中一ぱいに紙よまうくかりゆく枕の
数八色非ずくとも欲よまうどひく世界うゝやこ源をまと
いんその為よりの紙けづりてこのうきいつも他者が筆ゝ海お
ぐうゝ者ゝ八つぐまをまうふとも心のひさぎようゝん姫を
こま千金の美人とのべーかるる美見八さそのそ彼丹辺
ゝ海八風と言く押入の戸を照け抱世界く朱八が船の
方ゝゝそ川とゝのそやり又火神の例へ引く美を続ぎ姫
洞壺の蓋紙とゝく又ゝくそとく出くゆく朱八を姫経丹辺

ゝ海ぐうゝ八住ゝち紙するゝと思へば海もゆゝひゝんゝぐくく
ぐゝりゆるゝとゝゝ丹辺海ゝ今小紙ゝをゝうけてゝま表の方へ
出ゝ八ぐゝゝ八ゝとゝまゝ案ゝゝゝゝ川出案紙
くゝゆるゝち丹辺海八海ゝくまるゝぐゝく洗ゝ洞壺の
ゝ伝ゝ八持くまゆゝちくゝゝ丹ゝイくくすぐゝりゝく
ゝくゝおゝこゝゝアゝゝぐゝい年紙へゆそゝんゝトゝひゝぐゝ井
清紙火ぐゝち氏濡へゝゝくゝゝくゝゝゝくゝゝくゝゝくゝゝ
唐洞の年濡へ鉄瓶の湯紙すゝゝいゝくく鍋節をゝんと

ろのてふきゆをちくうけ陶器の物でうく〳〵今のちうく茶さ
酒茶うつ〳〵銅どうこの湯茶うハ〳〵〳〵の猪口ちよこ二三だの
猪口ちよこくてうくをつけ茶碗の中へ落〳〵そのうへ小皿
具をとろ〳〵くあるべ丹ヲイく米八コウ米八ヨヤも株入てさ
のうトそのとをぶうぶう出ようよ〳〵とまさう〳〵株ねちやアコウり
いぞ風をゑるくあサり〳〵くんぶできすぎるヨ新く一ぱい呑
ねいつものむすめのうちことのよや川茶ちよ〳〵とやゝ色
さのむすめのことをヲく〳〵とのうくさトいひうぶ〳〵

てうゝ茶出ゝく の中へのまちとのちきか猪のうへに
いろ〳〵ことまうある瀬戸物茶碗ぐ〳〵ろうまさ小あ茶の中
うハ米八ゞ丹ゞ弟のうちち茶作りぐ〳〵アんまべさぐうまゝく
猪のうまく言うまく元ハ五人でうゝのもうい
ものとまゞづけばさけばゞよ今ハまのぐくようり行とうさう
ようろうやゝとうちの八新もけづゝきび強よ丹ゞ弟ゞ
ひにもうるいと茶ゝとおもべとそあのやうよひつうひ茶
ゝくきげんをうくうまるうとちりへばまさ女房の法師く

何ぶもいろいろ洗く居る丹さんさんかりもものうるること
ヲイおとうとトいひるぐ〳〵抱巻の行灯のつく引おこさと
米八と一番ん釜ぐくもでとこの〳〵新まづちはとまてお拵
ちぐ〳〵るくさぐるの灯きまこのあ細いるぐくちよのと上へるぐ
抱出灯ちく引ケけちぐ〳〵のるい帯灯ちくやう匹
細帯の仕ろのまき灯細をつくまろる丹もあ今松の
仕のいる影ごろうちよるぜちよのとちぶまばい米
ナニよいヨトのひるぐ〳〵ころるぐ灯出ちく湯灯ちく丹ちんざ

まるどそんみ新灯しくみるのっモウいゝどやアねろつまるせてるぐざ
丹さんさんかりるぐ〳〵ちうトト箱灯ちくおあ
丹ハイりくトちくさき米ハイちぐりトちくずりと
ちくく掛例せうドとつひに出る丹ひるハ宝あのてし
の酒灯井へあけくわる灯よく洗ひまさ酒灯らもく
どうこくハまる下戸のちぐるこのちまろさくやとうこの酒
米八ちせうド灯つりくちまろくひだちの湯へまろる
丹サるくてうどいく糸のぐとりすぎくろ〳〵まさ今灯灯

みのさトいひあぐ〳〵ごうこうりゝごゝに米八さ丹こう
とゝて米〳〵こりやアもうごちそうさ様〳〵丹へイエもう
何もごぞのませんトコロ〳〵ひあぐ〳〵いふ米〳〵サアひとうさ
ぶうトてう〳〵紙とる

こゝまとり酒事の中もすべくいやゝゝかせり姉
ありおのづんとのよ行こうりる米八あまどさまたぶ
女の情るまゝ足けそのうまそ米出丹アんきのまゝ米八
ゝどけまゝど山乃の好き好男八ゝあ〳〵ゝび推〳〵ゝあ〳〵ん

第四條

丹〳〵ドゝおまゝづつゝぐやろう米〳〵ゝあアふゝうのヨまゝとおまゝに
つゝのゝゝろゝく呑むとゝろ紙仇きさんゝゝくゝどゝりてみ
まゝもするとあゝりを沂〳〵丹ゝゝゝ

けまどちまどの方でばくでもいつまでもそそ
ーぐつつ極くくつぐアあおまもつりいとおりくバそちめくに
羽衣後たづまとく泥みつくいまつくまとく蹴とり端ごうさま
てアんまど羽織ハをーくハねくけまどまんざーつかゆメがよろ
ーくハねくハあそまぐくもの色めが極後ふそ毒程ぐ
ねくとちまどの知ぐく毒ごと泥べべでーつ牧くこぞもー
く色めの機姫後毒うとおりつく居るのまぐ
そんみこそぐりいつくふ極ちめくおま後こまーーせくと

いつくぐうも仕ぐみめくじやノ牧くうそまとのよおまと
の方ーーー毒のどくうーー後引けとのハぬだりでいぐ
めるのノ朱何おまま後ぐちるのノそまぐけの罪ぐ何る
ーーおまくもいつまるのごろうーじやノうのくト猪口の
酒後のーーりーて下ま盃「そーてまーー徐方ガうのとおえ
ぐ仇おさんと切まくせくまひうまりやノ何もいまさま
ハ牧このごアる冊「冊アそそまぐーいつくーとまも男ガ
色後付くこのやまーーくハだりまーておるじやノ極くウナ

ゴゼ身うぐ〜考へるとあんまり働きぶれてよのう男ら〜
くも枝まき人おの〜さと〜毛屋があろうぐ何ぶ
あろうぐ妻てうのハあくりめく色ハ幾人ちとうてもこ方
のそ〜〜きく〜でくそまとよひきくあの〜〜うんざア久〜い迄
〜〜〜七ちめくの厄鬼何ひとうちまのことも多く釣〜て
世渡よ自つくゆそぶつ〜さげて釣のことよ自つうこ者の
と実ひよあまぶ初よあのそぶつきくいつそのことよ何も沢
ハ枝まひとう坊主ぐくも自つくちまやア双方静よ

絡りも付〜のつとも左振のとあ〜しのぶ〜ちもあまでやア
ずいぶん苦労〜極でも自〜あのつの義も口けてよ〜きく
一ツハ先ゑ自つと唐琴やの義理ある為親へ第一番の云訳
ぶ〜〜あまと一人この世界捨くく〜め〜さくすりやアいさてふいう
枝とのふのものご只一途にきまくく〜まくだいとふけまで
ちあくもあまとどやアいろく〜と若方くげん〜てうまてうこの
逆ふまと情の先入引ねこ〜ろのあめくぶ〜何もかも春こんで
あるぶ〜ろう〜切まるきまねのいりことけも義和のうくの

春雅門人
春雅

新郎様と言る月よりやア今のとおりよそまとうりあるよ
智恵のない一疋前ものこと〳〵いひとけの去やう八
様へトおりひつめる丹次郎が新ぢつと見つめく米八を
眼よりも張たり〳〵裏紙で新様あいく一丹さん
情無しくあつまよそまどやアるわど私がわくまで
こるしのサ何もまへよ新郎様いつくこまくせるのじ
めるのとそうらのとのどやアのるまいどやア言いう一
うういろうてもまへもやつこそまわどまでこそ私のあく

きまのくあどこいつくくまるのあるくまやすあるも
あまへのいろくあるまづこるかろあと切まくあまろ〳〵繁る
あところと一ぱいこくきろくくくまるがいどやアるのく
ことくそうあのひどろく私の方でもそまあまさきき
どりもくへあまひどやア言のくろつとも私も羽形様
あんるよくくこのくこるくくもあくこうくあまへよ新
関もかくせこうづそまへのくくのくまでも私の
こるのこまもくろ私とあまへが財ぐゐる知へ踏こんぐ

まことにこんなそうぐうしようとは
やはりのちの世のことこそはけまでは私とあなたと対でおる
べき筈なれども我儘しそうげでおまへに
根ねばるのこのつくそこぶるのこの者ーさまとすこーし
引張るとぶるのぐく義理とのくんじやア
そのうりくんあまよ赤一厘。
あるまうの私と仇吉ぢんとあちらはうあるもそん
なよ賀成いろくとこのようにまーせるやうあとこもらひ

なもるめくそうしよきまくとのつく高の諸沢も
遠ふまも。のちやくらやうくそうくよ切くあまうく
女房の仇吉ぢんよ切の中成体めさーくおりざうう
ぶ仇の成のふにも私ぶ平うあぶのぐうくーあ私とぐうくあのぶ
くーあうくぶのくまさ私の方ぶくまくば初見にくと
名も付ものーまひマアくもかくも丹さんぶんくく私ぶくる
くさどうぶ堪忍ーくあまよ。そりやうのう私もあ
高田くあ代元の仇吉と出合ーくあり家関まぶく強ーく

月ぐまでこの程ぎり〳〵と消えくあまのゆうまへ七地がう
ぞうのようなものこの子丹さんどうぞ彩〳〵七おくまこれ
くへ私もモウすこしもきをつかいのめくうどうぞこの
きんぢの宅や又この宅へ行ぐ今まぐく行ぐ二間へ行く
てくよりくおつまこの婿方へ新妻〳〵もるくとおもの船
ぞんぢん
殘念ぞうぞうトのくおまへぐうくも私ぐこんのふまうう
切きてことのつまりやうあるわど男も立まのうくまるぐく
きまくおられこのよまこと私も見わど若旦方〳〵七

いやうよさまるこのうまるも海〳〵のうくぞうぞ丹さんゆ
ロけそこのことだりハ海〳〵七おくまおおひやりの船へ
やうよりくおまへこのいうまいくりよ高安そうー
ておつまこよ私もまこと新ぢけ七〳〵もうこのこと我いう
まのうくまくーおまへだり初こくく彩んぢこのこたくよ
高やうりてハこまくー仇高ぢんぢ義新ーー船へこハおまへの
私こうも絵方もこまくのけまどハテそこぢおまへのかハいぢる
人のこてぢうくぢうもうこうーどやア方のうくぼアけこくく

おくまどの〻今迄にもおまへゞ仇吉さんは違ふいやく
〻こゝ我ゝ計を私の影〻我ゝ〻ゆゝしくセトいひうけて
ゐるこゞをあのそうるこゝ
とゝのおもひまとり　そゝ七せうくこゝらくとゝをせそおきりの
期ゝ我ゝあんゐよゝこゝ三郎成ようくいうくひやまいく
おくまどおそゝこゞく義知しくさへおくまどの〻今のとゝりまこ
まゝこゝひおやうこゞ我するのゝどやゝゐいゞ場吉さんの宝や
ちよゝ代ゝ〻ちよゝ代ゝでも我ゝくおくまゞこゝトつのまこゝこゝも
ゞまうくゐゝくゐるゝとゝうくゐのも私ゞさうのゞこゞゐ

仇吉さんやおまへくゐやゝこゝのこゝもひうまの
けまゞそこゞが私のおこゝのゞこゞうゐ私のやうおゐのぐも今
まゞの好身ゝ彩我ゝ三さゝくおくまゞおゐエモシ丹さん
おゐ彩ひゞゝョト和合ゝ出る利義の米八丹ゝ弟ゞらふ
ゞきゞこゞも右我ゝうゝく左りゝ行もゞ川と一年板義ゝ
ね出生の理借ゝ丹ゝ弟ハあゞ三のゝとりゞもゐく初の
中ゝでハ仇吉も和ゝくハゐけまゞきゞ米八ゞ三まハゝを
ゝけゝく又ゝまゞゐゞこんゐよ利ゝ生ゝくゝうくゝ中ゝ

よろこびあつくさうさあるまぶきあるまぶきあるまぶき

機嫌取るりーく　ちごやうふ何くらぬ　新よ月取すごー

そのうちひとりに　きを取つけく　乃るに　ちうぞと　公ひとろ

に　清こと　やりく　品　第取　さごあても　色よ　角　涙八　とぞま

らぞ　乳　より　病のさー　新る　廣取　ちさ　くねさりける

白鄭　丸　姉ぐ　ろろー　梅の　花

いろまも　あ取も　日きぞ　この　称清る

梅曆
餘奥　春色辰巳園巻の八　終

文政三八年中十八